

SDGsで行こう¹海を守り、仲間を繋ぐ走るギャラリー

「山に木を植えろ、海（サンゴ礁）を守るなら。」¹ この言葉は、陸上と海中の環境がいかに互いに絡まりあっているかを、いみじくも表しています。美しい伊豆創造センターは、そのようなSDGsの考え方に地元住民、とりわけ中高生が触れられるよう、SDGsトレインを走らせはじめました。

伊豆半島では、SDGs達成に向け、様々な団体が取り組んでいます。自治体、NGO、農協、マリンスポーツの指導者たち、それにスーパーマーケットまで。例をあげましょう。上流の街では、定期的に川の清掃と環境教育プログラムが行われています（SDGsターゲット6）。中流域の農協は農薬や化学肥料、プラスチック製品の利用削減に真剣に取り組んでいます。そして、河口ではダイビングのインストラクターたちが、水中の異物を取り除きサンゴを活性化させています（SDGsターゲット14）。しかし、これほど有意義なことに取り組んでいる人々が、残念ながらお互いの取り組みも顔も知らずにいました。たとえ普段活動している地域の外と生態学的なつながりを意識していても、地域の垣根を超えたパートナーシップは生まれませんでした。この状況を変えるため、美しい伊豆創造センターがまず始めたのは、会議という形で彼らに顔を合わせてもらうことでした。

そして伊豆を縦断する電車がプロジェクトのシンボルとして選ばれました。それぞれの団体の取り組みは、3～5枚の車内ポスターで紹介されています。ポスターには、他の事業とのつながりがわかるようなキーワードを入れてあります。そして、ポスターの繋がりを追うことで、乗客が何か一貫したテーマが学べるよう念入りに考えて配置されています。それはたとえば内陸の奥深い場所から観光客で賑わうビーチまでが、生態学的に繋がりをもっているということだったり、環境への負の影響を和らげるため、様々な事業をコーディネートすることの重要性だったり、あるいは、システム思考という考え方そのものだったりします。

電車を展示会場としたことには、もう一つの狙いがあります。伊豆半島は大変モータリゼーションが進んだ地域なので、電車の（各駅停車の）主な乗客は免許のない中高生です。この動く展覧会は、その若者たちに向けた私たちの招待状です-海を守るパレードに加わりませんか？

効果的に海を守るには、包括的に取り組むこと、市民が手を取り合って取り組むことが欠かせません。伊豆半島ジオパークは、そうした力を集め、結束させていく（光を集めるレンズのような）存在でありたいと考えています。

¹ タイトルは、スタンダードジャズの楽曲「A列車で行こう」をもじったもの。